未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

㊱ 支倉の衣装は和洋混交だった

レースの衣装を着た支倉

肖像画に描かれた支倉の衣装は、見るからに高級な羽織と袴だったことがわかりますが、襟元と袖口にはレース模様が描かれています（図1）。なぜ支倉がレースの衣装を着ているのかについては、いくつかの考え方があります。

第一は、羽織の下は小袖ですが、さらにその下に来ているのは襦袢（じゅばん）であり、レース襟も襦袢の一部だとする考え方です。よく見ると袖口にもレース模様がありますので、襟と袖にレースをあしらった襦袢だということになります。

ただし問題は、当時の日本にレースの襦袢があったのかどうかということです。レース模様はヨーロッパ由来ですから、もし日本式の襦袢にレースを継ぎ合わせていたとしたら、日本の衣装にヨーロッパ由来の要素が取り入れられていたということになります。仙台市博物館では、この考え方で襦袢を復元したとのことです（図2）。ということは、日本でこのレース襦袢が作られて、支倉がローマに持参して着したという考え方になります。

第二の考え方は、羽織の下は小袖、その下に襦袢を着て、さらにその下にヨーロッパのレースシャツを着ているのではないかということです。日本の襦袢の下に、襟元と袖口にレースが付いたシャツを着ていたのではないかということ見方です。

ほかに第三の考え方もあります。首元と手首のレースは襦袢でもレースシャツでもなく、付け襟と付け袖ではないかとするものです。部分的な装着品ですが、これも男性用のファッショングッズとして当時のヨーロッパにありました。

第一の考え方であれば日本で作って持参したもの。第二と第三であれば、支倉が現地で入手して着飾ったということになります。はたしてどれが真実なのか、悩ましいところです。これを考えるにあたって、もう一つの支倉常長像を参照しておきましょう。（図3）。

この画で支倉はヨーロッパ風の黒い洋服を着ていますが、首元と手首の襟にはレースが描かれています。デザインは図1のものとよく似ていますので、先の第一の考え方だとすれば支倉は日本で作ったレース襦袢を着て黒い洋服をまとったということになります。ただ当時ヨーロッパではレースシャツがはやっていましたから、それを着して祈りの絵が描かれたと考えることもできます。『仙台市史 慶長遣欧使節』の衣装解説では、「レースの飾りのついたシャツ」としています。

もし図3と図1のレース襟が同種のものだとした場合、図3はレースシャツだという見解ですので、図1に描かれた襟と袖のレースも日本式の襦袢を加工したものではなく、ヨーロッパのレースシャツである可能性があります。そうであれば支倉は、羽織・袴と襦袢の下にヨーロッパのレースシャツを着たということになります。

このように支倉がローマで着していた衣装に注目すると、あのレース飾りは何だということが気になるのです。その三つの可能性を紹介しましたが、文化史的観点からすると、いずれであっても日欧文化の融合を示しているといえます。

第一のレースの襟と袖が付いた襦袢であったとすれば、当時の日本において和服の襦袢にまでヨーロッパのデザインを取り込んだ新たなスタイルの衣装が生み出されていたということになります。衣装の文化混交が実現していたということになりますので、服飾史において注目すべきことだといえます。

第二のレースシャツだとすれば、渡欧したのか、もう少し追究したほうがよいでしょう。

支倉常長のポジティブな性格

支倉肖像画には、ほかにも注意すべきことが描かれています。一つは、左手の薬指に指輪をしていることです。図1と図3の肖像画のいずれにも指輪が描かれています。当時の日本には指輪をする習慣はありませんから、渡欧して手に入れたものでしょう。あるいはスペインかローマの貴人からプレゼントされたのかもしれません。

もう一つは、支倉の横の机の上におかれた西洋風の帽子です（図1）。これも日本から持参したものではなく、スペインかローマで入手したものだと思われます。連載㉞でローマ入市式の様子を紹介しましたが、白馬にまたがった支倉はローマ風の帽子を振りながらパレードをしたとありますので、この帽子をかぶっていたのでしょう。絵をよく見ると、ツバがずいぶんと小さく描かれています。パレードのイメージ画では幅広の帽子で描かれることがあるのですが、いったいどんな帽子だったのでしょうか。

羽織・袴の和装にもかかわらず、ヨーロッパのレース襟を身につけて帽子をかぶり、指輪まではめていたのですから、考えてみれば不思議な身なりです。政宗は支倉に高級な衣装を与え、日本のすぐれた衣装文化をヨーロッパに紹介しようとしていました。支倉はその意を体して、市中パレードという晴れ舞台でお披露目をしましたが、もしレースシャツを支倉が入手したものであったとしたら、政宗も考えていなかった装いをしていたことになります。それが和服の下に西洋風の衣装を身につけ、帽子をかぶって指輪をするというファッションでした。支倉はみずからの身体を用いて、和の文化と洋の文化を融合させて表現していたのです。

和洋混交を身体表現した支倉の姿をみると、彼は新しい文化の吸収に柔軟で、それを前向きに表現することができるポジティブで明るい性格だったのではないかと思われてなりません。

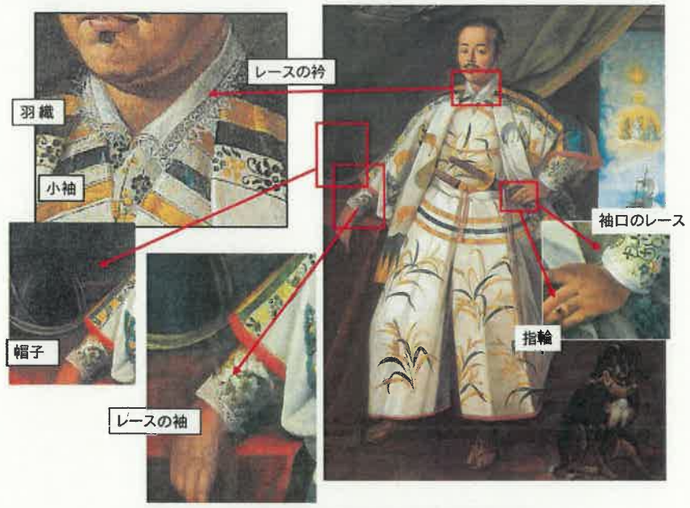

図 1. 支倉常長肖像画の部分拡大

図 2. レースの襟と袖が付いた襦袢（複製。仙台市博物館）

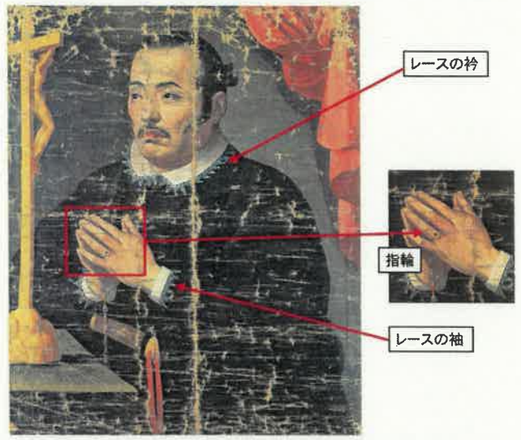

図 3. 「支倉常長像」仙台市博物館蔵

筆者略歴

昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。